



TITLE:

佐賀縣の自然地理(三)

AUTHOR(S):

堀, 米次

CITATION:

堀, 米次. 佐賀縣の自然地理(三). 地球 1932, 18(2): 120-125

ISSUE DATE:

1932-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184070>

RIGHT:

佐賀縣の自然地理 (三)

(第十六卷第五號の續き)

堀 米 次

第三節 松浦、杵島地區

丘陵群地帯
第三紀層地帯
縱構造地帯

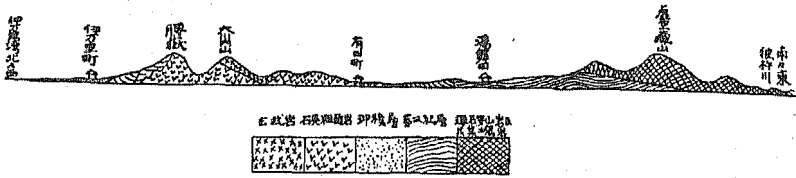
區域 本區は本縣の西部一帯を占める東松浦半島及び其の根幹をなす杵島郡西部の丘陵の多く起伏せる第三紀層地帯を包括せるものである。而して其の範圍は、東は松浦川斷層谷、或は兩子山、杵島山等の小地壘山脈によつて背振、天山地區、並に佐賀平原地區に續いてゐる。そして北部は東松浦半島及び近海に散布する多くの島を擁して玄海に望み、西は壹岐水道或は長崎縣北松浦郡並に東彼杵郡に直接に續き、其の中間に伊萬里灣の奥行深き陷沒灣がある。而して南は鹽田川の東西線を劃して多良火山地區に

連なつてゐる。

地形と地質 本區は既に述べたる背振、天山地區とは地形も地質も或は地帯構造等も頗る狀態を異にする。即ち地質は主に第三紀層並にそれを貫ける玄武岩、石英粗面岩等より成る。地形も亦概して丘陵性にして、其中數峰を除く外は多くは海拔四〇〇米以下のものが大部分であることと、甚だ長き海岸線を有すること——即ちこれは沈降式の屈曲多き海岸であるが——並に多くの河谷や海岸線や地壘山脈の方向等が明示してゐる様に、多くは南北方向と東西方向の地帯構造を示せることが本地區の最も他と異なる點であらう。

擬て次に本區の垂直肢節を通覽するに、既に前述せる如く、丘陵性の小起伏を示せる地帯が

第五圖



佐賀縣の自然地理(三)

大部分であつたが、次に其の詳しき研究の便宜上其の地形地質の特色によつて左の三帶に區別してみやう。

A 小地壘群地帶

B 第三紀小丘陵地帶

C 玄武岩臺地帶

この三帶の境界は、先づ小地壘群地帶と第三紀小丘陵地帶との境を伊萬里町と嚴木村牧瀬とを結ぶ線とし、次に玄武岩臺地帶との境界は東松浦郡の西南隅たる切木村杉野浦と、東は松浦川中流なる徳須恵盆地とを貫ぬる線を以てする。

A 小地壘群地帶

此の三帶の最南帶なる小地壘群地帶は特に西部に海

拔高き所あり。即ち佐賀、長崎の兩縣境には殆んど南北に走る西ヶ岳地壘、或は北と平行して大川内岳地壘がある。兩者は有田川の構造谷の兩側に聳える南北に走る小地壘である。西ヶ岳地壘は北は長崎縣の石盛山(四二四米)に初まり、東南なる國見山(四九五、九米)並に標高五二三米の無名の山を経て、烏帽子山(六〇五米)に至て南折し、國見山(七九五米)八天岳(七〇七米)に連り、隱居岳(七七四米)の北東に終る。これは長さ二十五軒、平均高度約六〇〇米なり。其斷層崖上には大體南北に走る平頂部を乗せて有田川斜面に凡そ三〇〇米乃至四〇〇米の急傾斜の斷層崖を向けてゐる。山背は東は佐賀縣側に急傾斜せるに反し、西なる長崎縣側には緩斜せる非對象的地形である。此の地壘の基底は第三紀層よりなり、山頂は玄武岩によつて被覆されてゐる。

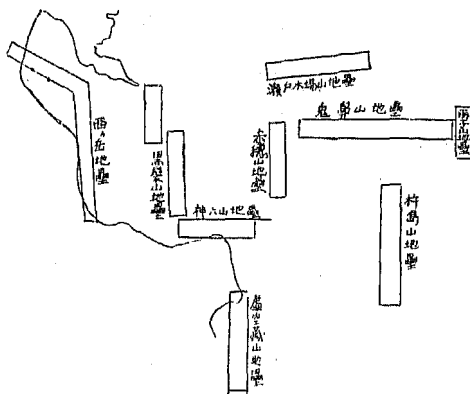
有田川谷(即ち此處では有田川斷層線と命名す)を隔てて西ヶ岳地壘に對聳せる大川内岳地

壘は伊萬里町の南方腰嶽（四八七、七米）に初まり、南々東なる牧山（五五五米）青螺山（五九九、二米）黒髪山（五一八米）及び金山岳（三三二、二米）に終るものである。山背の長さ約九軒である。腰岳の山體は石英粗面岩と玄武岩とによつて成り、一に伊萬里富士の名を有する程山容優雅であり、黒髪山及び青螺山は共に石英粗面岩或は輝石安山岩及び集塊岩によつて構成され、其山骨は露出し、山腹斜面の傾斜も大にして奇勝に富んでゐる。従つて其表面の地被は薄くなり極端な場合は全く存在せずして、處によつては岩峰或は岩石稜を生じて全く岩石斜面を構成してゐる。又此の山の諸所にある谷壁に垂直な岩壁を現す様などがあるのは、風化作用の速度よりも浸蝕の速度が充分に大きい事が判る。

次に大川内岳地壘の南々東に當つて、藤津郡と東彼杵郡との兩郡境に、虚空藏山脈と呼ばれる小地壘がある。これは虚空藏山（六〇八米）を

中心に北に四八五米と三十一米の無名の山、南に高見山（五二〇米）を控へてゐる。此の山脈の北部には神六山（四四七米）の小地壘が東西に走つてゐる。

第六圖



又本地帯の東部には玄武岩によつて構成されたる八幡山地壘が、八幡山（七六三、六米）を中心として、東には瀨戸木場山（六八五、五米）西

には輝石安山岩より成れる眉山（五一八・二米）の三山が東西に約一〇軒に互つて配列してゐる。

其の南には鬼鼻山地壘が聖嶽（四六七・七米）を盟首として東には兩子山（三六一米）を、西には馬上峠（一二〇米）を越えて徳連山（四四四米）を控へて、東西十六軒に互つて連つてゐる。實は兩子山の如きは精密に觀察する時は、それ自身に於ても南北に走る小地壘である。即ち兩子山及び其の南に大平山（二七一米）男岳（二四五米）を従へたる六軒の小地壘山脈であつて、西なる鬼鼻山地壘とは海拔約七六米の鈴山峠によつて切斷されてゐる。

此の南には六角川の沖積平野を距て、杵島山地壘が南北に配列する。これは杵島郡を東部なる低原部と西部山地帯とに分つ境界山脈であつて、北は橋下村に發し、南は鹽田川の左岸に逼るところの長さ八軒幅約二軒の美事なる小地壘である。

これの西に隣つて六角川の上流たる武雄川と潮見川に挟まれたる御船山（二一一米）を中心とするもの、或は更に其の南部に虚空藏山（二八七・九米）を盟主として東西に走る小地壘が存在する。されど何れも標高低く、又開析も細かに行はれて、極めて不明瞭な地形を呈する。又これらの地壘群の中心には松浦川の上流たる鳥海川や其他の小支流によつて扇狀に開析された赤穂山地壘が、赤穂山（三〇〇米）を中心として南北に走り、其の東斜面なる六角川の支流たる武雄川との分水嶺をなし明かに表佐賀縣と裏佐賀縣の境界となつてゐる。

B 第三紀丘陵地帯

次に第三紀丘陵地帯についてあるが、此處は殆んど全部第三紀層の單純なる丘陵の連續である。唯僅かに伊萬里の北部、太平山附近並に大野岳、外極めて局部的なる數ヶ所に玄武岩が存在せるに過ぎない。そしてこれら數ヶ所の火山岩分布地域を省けば全部百米から二百米前後

の小丘の連續する地帯である。

C 玄武岩臺地帶

最後に本區

の最北部なる

玄武岩臺地帶

の地域は東松

浦半島全體に

亙つてゐる。

此の玄武岩は

花崗岩或は第

三紀層の表面

を被覆してゐ

るのであつて

地形は次の寫

眞に示すが如

き極めて起伏

第七圖



平頂の玄武岩臺地 (唐房灣岸の平頂の臺地を示す)

の小さき玄武岩臺地を作つてゐる。此の地帯の花崗岩の分布は主に松浦川下流左岸の山本附近から唐房灣岸に達し、西は有浦川中流に及ぶ一帯であつて、其の殆んど中央部を南北に玄武岩によつて被覆されて、花崗岩の地表による連絡は中斷されてゐる。そもそも此の一帯は小川博士の説によれば白堊紀から第三紀時代に遷る中間に於て大變動を生じ、筑紫山脈は西北方向に斷裂して背振、天山々塊と長崎縣西被杵半島との間に幅の廣い地溝狀の陷沒帶を生じた。そして第三紀の初期から此處に海成層や陸成層が沈積して介化石や石炭層を夾む所謂第三紀層が廣い地域に亙つて發達した。西北部の炭田は此の如く第三紀の古層中に含まれてゐるが、第三紀の新期になつても淺海或は陸成の堆積は形成され、部分的には玄武岩の噴出もあつたのである。次いで南には多良火山の噴出があつたり、或は地盤の昇降運動も之に伴つて起つた。斯くて第三紀層地帯も浸蝕開析によつて地表は著しく彫

刻されてゐた。これが全體として沈降した結果
到るところに溺れ谷を形成し、現在東松浦半島
や北松浦半島（長崎縣にあり）に見るが如き極め

て複雑なる鋸齒狀の沈降海岸を生じたのであ
る。次に此の海岸についてしばらく述べてみよ
う。（未完）

地名の地理學的考察とその一例（三）

（第十六卷第
六號の續き）

小林 悟 一 郎

h、方

之も平面を基本思想としたもので、方向のみ
ならず方域の意味にとつてもこゝに入れるのが
至當と思はれる。大體左の如きものである。

野方（早¹・眞方（糸）・壹方、只方¹・姫方²・姫方（三）³・北方（杵）¹＝
六府方（杵）平方（井）

平地の二個は別として、山地部のものはよく
地形の變化が方域の觀念に密接に作用してゐる
ことを物語るものだと思ふ。（第二圖參照）貝
方のみは山深き谷であつて峽方の意であるから

別として、他は皆山麓である。野方は延喜式な
どに額田驛とあるものだとしてゐる。タを田
に取るならば糠田又は深くて足が埋れて行くヌ
カル田であらねばならぬが、筆者地形を案ずる
に叶岳列の丘麓原に近くあり、その北西なる「平
原」なる地名と思合せて、ヌカタなる音に變り
ないが、野方の用字が妥當なるを想ふのであ
る。

眞方は加布黒村字東の谷の東側にあつて、小
丘を負ふ。その小丘の北端には野添がある。共